「すべてを満たす」

エフェソの信徒への手紙　１：１５-２３

２０２３年7月２３日
野村　友美 師

＜「きんさい」と招くイエス様＞

　今日は伝道礼拝、通称「きんさい」礼拝です。私は関西の出身なので、この「きんさい」という言葉は呉に来て初めて知りました。

関西弁だと「おいでやす」が近い感じなんでしょうか？それぞれの土地の言葉に出会うのは、楽しいものですね。そういえばイエス様とその弟子たちも、いわゆる標準語じゃなくて、出身地のガリラヤ地方の言葉を話していたようです。

だからイエス様が「いらっしゃい」と言われる時は、もしかしたら「きんさい」とか「おいでやす」という感じだったのかもしれません。

さて、今日ご一緒に読んでいる新約聖書のエフェソの信徒への手紙を書いた使徒パウロという人も、イエス様から「きんさい」と呼びかけられた人でした。

　パウロは元々、イエス様を救い主だと信じるキリスト教徒たちを迫害していた人だったんです。パウロは真面目で熱心なユダヤ教の信徒でした。旧約聖書の時代から神様がイスラエルの人々に約束しておられた救い主、メシアが現れるのを、ずっと待っていました。でも、というか、だからこそ、イスラエルの人たちがメシアに期待したような強い王様にならなかったイエス様を、パウロは受け入れられなかったんです。

十字架刑で死んでしまったナザレのイエスなんか、神様が遣わした救い主じゃない。あんな偽者をメシアだと信じる奴らは、みんな間違っている。

そう信じていたパウロは、ひたすら自分の「正義」に従って、イエス様を信じる人が増えるのを防ごうとしていたんです。

そんなパウロに、ある日イエス様が呼びかけました。その日も、キリスト教徒を捕まえるための旅に出ていたパウロは、歩いている途中で突然、天からの光に照らされます。

びっくりして地面に倒れ伏したパウロの耳に、こんな声が聞こえてきました。

「なぜ、わたしを迫害するのか。」

この言葉を聞いて、パウロはますますびっくりします。だって、明らかに神様が関わっておられるとしか思えない天からの光の中で、「あなたはわたしを迫害している」って言われたんです。

自分は神様のために働いている、偽者の救い主を信じる間違った信仰を正してやるために頑張っている。

そう思っていたのに、神様の側から「あなたはわたしを迫害しているんだ」と言われたんですから、パウロはどんなにショックだったかと思います。

「主よ、あなたはどなたですか？」

恐る恐る尋ねるパウロに、その声ははっきりと応えました。

「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」
この直後、パウロは目が見えなくされて、ショックと混乱の中でアナニアという一人のキリスト教徒に出会います。イエス様に導かれたアナニアは、パウロに手を置いてこう伝えました。
イエス様はあなたの目を見えるようにして、あなたを聖霊で満たすために、わたしをここに遣わされたんだ。イエス様があなたに、「きんさい」と呼びかけておられるよ。
それを聞いた途端に、パウロの目から鱗のようなものがポロポロっと落ちて、元どおりに見えるようになりました。これが「目から鱗」という諺の元になったエピソードです。
　この出来事で、パウロの人生は１８０度変わりました。イエス様を救い主だと信じる人たちを迫害していたパウロが、その場で洗礼を受けて、今度は「イエス様こそ救い主だ！」と他の人たちに伝える使徒になったんです。イエス様の呼びかけは、本当のことが見えなくなっていたパウロの心の目からも、思い込みの鱗を落として見えるようにしたんです。

＜心の目が開かれるように＞

　だから今日の聖書の言葉で、パウロは祈りを込めて私たち一人一人に呼びかけています。
あなたたちの心の目も、聖霊が開いてくださるように、と。かつてイエス様が、パウロに「きんさい」と呼びかけて、パウロの目を開いてくださったように。
私たちに働きかける神様の霊、聖霊が、私たち一人一人の心の目を開いて神様の愛が見えるようにしてくださることを、パウロは期待して祈っているんです。目の前の出来事だけでは測りきれない神様の思いを、神様が与えてくださる希望と喜びを、見つめることができるように。
小さな私たちには予想できないようなことを起こしてくださる、神様の力の果てしなさを信じて、頼って期待できるように、一人一人の心の目を開いてください、とパウロは祈っているんです。
教会のために、そこに招かれている一人一人のために、私はいつも祈っている、とこの手紙を書いたパウロは語っています。
　神様は私たち一人一人に命を与えて、愛しておられます。
イエス様によって私たちは罪から救い出されて、神様と一緒に生きる命を差し出されています。
パウロたちの時代から今に至るまで、教会はずっとこのことを伝え続けているんです。
一週間の初め、こうして礼拝に集まるたびに、ここで語られ続け、また聞かれ続け、祈られ続けていることです。
それでも、私たちの心の目は気がつかないうちによそ見をしたり、開けてるつもりでウトウト眠り込んだりしてしまいがちです。自分の好みに合わないことが見えそうだったら、あえてぎゅっと心の目を閉じて、見ないふりをしたくなる時だっ

てあるでしょう。私たちの心の目はなかなかに素直で、自分に正直ですから。

「神様の愛を見つめていたい」と思っても、目の前にはいろんな出来事が覆いかぶさってきて、私たちの心を暗く塞いでしまいます。

この世界はいつだって、私たち人間の罪が生み出す争いや、痛みや悲しみに満ちています。

生きて動いて変わり続ける自然の力は、時に私たちを巻き込んで、災害という思わぬ悲劇を引き起こします。私たちの人生の旅路はいつも、暗い夜道を歩き続けるような不安と緊張に満ちています。それが身にしみてわかっているからこそ、パウロはわざわざこの祈りの言葉を手紙に書いて、この手紙を読むすべての人に、「祈りなさい」と勧めているのでしょう。

目の前の出来事に、希望が見えなくなったら。神様が愛していてくださる、と信じられなかったら。こんな状況も、神様なら必ず救いに変えられる、と信頼できなくなったら。

「私たちの心の目を開いて、あなたの愛を、希望の光を見せてください」とあなたたちも神様に祈りなさい。

暗闇から光の中へ、必ず導き出してくださる神様の愛と力に信頼しなさい。

そうパウロは私たちに教えているんです。

＜すべてにおいてすべてを満たす主＞

神様がどんなに予想外の力をふるって、何を成し遂げられるか、イエス様の出来事を見ればわかるはずだ。自分勝手に逆らってばかりの私たちを、それでも愛して救いたいとお思いになって、神様はあんなにすごいことをなさったんじゃないか。そう私たちに確認させてから、パウロは祈りの締めくくりに入ります。

今日の聖書の箇所は、こんな言葉で結ばれています。

「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。」

神様のひとり子が人間になって、すべての人の罪の責任を身代わりに背負って、十字架で死なれた。それだけでも十分に予想外なのに、神様は死んだイエス様を復活させられて、すべてのものを支配する神の国の王様になさった。

そのイエス様が、この地上で生きて働かれるための体が「教会」だ、とパウロはここで宣言しています。

約束されている終わりの日、神様の愛がすべてを治める天の国が、この世界に完成されるその日まで。

教会はすべてのものに神様の力を働かせるイエス様の体、つまりイエス様が神様の愛を届けるためにお使いになる、イエス様の手であり足であり、目や耳や口や、指の１本１本だ。パウロはここでそう言っているんです。私たちが生きるこの世界に起こる様々な出来事も、私たちが生きていく中

で出会う悲しみや悩みも、最初から全部神様がガチガチに計画しておられたとは、少なくとも私は今のところ思っていません。
私たち自身の弱さや、失敗や、自分勝手な思いが生み出す悪いものの責任も、丸ごと全部神様になすりつけて「神様がそう決めておられたことだから」と言うのは違うような気がしています。
だって神様はこの世界を、私たち一人一人を、こんなに生き生きと変わり続けるものとしてお造りになったんですから。
だからこそ、パウロも私たちにこう宣言しているんじゃないでしょうか。
私たちの弱さにも失敗にも、悲しみにも悩みにも、変わり続ける中で起こるどうしようもない出来事にも、すべてのものにイエス・キリストが働きかけてくださる。すべてのものに働きかけて、すべてを神様の愛と救いで満たしてくださるお方が、教会を満たしておられる。
そう確信しているからこそ、パウロは教会のためにこう祈るんです。
私たちの心の目を開いてください、と。
どんなことの中にも、神様が与えてくださる希望を見せてください。
どんなことの先にも、神様の愛と救いを信じる者たちに約束されている喜びを見せてください。
どんなことも愛と救いで満たしてくださる、神様の力の果てしなさを、私たちにわからせてください。
パウロはそう祈り求めているのです。
　すべてにおいてすべてを満たしている方の、満ちておられるところ。すべてのことに神様の愛を満たすために、今も生きて働かれているイエス様の体の真っただ中に、私たちはみんな「きんさい」と、今日もこうして招かれています。
ここにいる私たち一人一人を通して、この教会を通して、イエス様がどんなことを起こしてくださるのか。どんな希望と喜びを、神様は私たちに見せてくださるのか。
期待しながら、ご一緒にこの場所から、新しい一週間を始めようではありませんか。
一日一日、聖霊が私たちの心の目を、神様の愛に向かって開かせてくださいますように。
お祈りいたします。